

あなたをまもりたい

「はくたかと白山は車両を共用とする」
新しくやってきた上司から告げられた言葉に、はくたかも白山も目を丸くした。

「あの、それはどういう」

「今まで向日町の485系で運転していたはくたかを、金沢の489系に置き換えるんだ。経路は違うが発着駅は同じなのだから不都合はないだろう？」

白山は頷きながらも、ちらりと隣に立つはくたかの方を見た。今までと同じ車両を使う白山と違い、はくたかはしばらくの間慣れない車両を使うことになる。それも、今までより本数が増えるという変化に加えて、だ。

しかしはくたかは落ち着いた表情で、首を縦に一度だけ動かした。その動作で了承の意を示したはくたかに上司は満足げに頷いて、下がちなさいと言った。深々と一礼した二人は、その部屋を後にする。

「先輩、良かったですか」

「何が？」

上司の部屋からの帰り道、並んで歩きながら白山ははくたかに訊いてみた。しかしはくたかは何を訊かれていのか分からない、と首を傾げて白山の方を見る。

「車両の事です」

「ああ……別に私は構わないよ。走れるのであれば、身体は何だつていいんだ。乗客を乗せて走る事が私たちの仕事だから」

そう言いながらも、微かにはくたかの肩が震えているように見えたのは、決して白山の目の錯覚ではない筈だ。長い間一往復だった所がこの秋にようやく二往復になる事に加えて、急な車両変更の通達に戸惑わない方がおかしい。

白山ははくたかの手を取るとぎゅつと握りしめた。冷たく細い手が驚いたのかビクリと震える。

「白山」

窘めるような低い声ではくたかに名を呼ばれた。が、握られた手を強引に解くことはしない。あくまで白山の意志でもつて手を離させようとするのがはくたかのやりかただった。

「誰も見ていませんよ」

「でも、いつ誰が来るか分からないじゃないか」

白山が手を離す気配が無いので、仕方なく自分から逃れようとはくたかは指を動かす。しかし白山は動く指に更に深く自分の指を絡めて、離すどころかもっと強く手を握り返した。はくたかが自分の元から逃げていかないように、と。ようやく手に入れたこの人を二度と手放すつもりはない。

「後で、部屋に行くから」

ね、と白山を宥めるように言うはくたかが可愛い、と思う。が、年上で先輩であるこの人にそんなことを言えば怒るかもしれないから黙っておくことにした。あまりに困ったというように眉の根を寄せながら、手を離してくれと頼むので、これ以上我が儘を貫くのは難しいと判断した白山は、名残惜しげにその手を離した。

「約束ですよ。絶対ですよ。今日は雷鳥先輩に誘われても飲みに行ったりしないでくださいよ？」

「分かっているよ。もう……」

白山が離れた手をそつともう片方の手で包み込むようにして、はくたかは白山を睨んだ。が、その目には怒りなど微塵も浮かんではない。むしろ我が儘を言う後輩を宥めるような、そんな優しい視線に白山は自分が嫌われていない事を実感する。

「それじゃ、また後で」

そう言つてはくたかは先に行つてしまった。遠ざかつていく姿に一抹の不安を覚えながらも、その不安がどこから来るのか、白山には分からなかった。ただ先に仕事に向かっただけの事なのに、いつか本当にこんな風にしてはくたかに置いて行かれてしまうのではないか、と思わずにいられなくなる事が時々あった。

風の噂で聞いた、新幹線の建設の話。首都圏と新潟を結ぶというそれは、今の上越線とほぼ同じルートを走るという。地元の反対や工事が難航している所為で未だ完成の目処は立っていないらしいが、それも何処まで本当か分かつたものではない。何故なら、国鉄の技術力が凄い事を白山は知っている。

去年の夏に土石流で流された信越本線の橋を架け直してくれた技術者達の事を思う。足場も悪く、並行して走る道路がない位の高山奥だつたにも関わらず、復旧まで半年と掛からなかった。だから彼らの手に掛ければあつという間に線路が出来てしまうのではないか、と思うのだ。

「……駄目だ、僕は」

ここ最近ネガティブな思考に囚われがちだと、首を横に振つた。今は業務に集中しよう、とパシン、と自分の頬を軽く両手で打つた。

走り始めて六年が経つた今、白山は毎日三往復の列車

を運転し、名実共に北陸と首都圏を結ぶエースとなつていた。



すつきりと晴れた青空をホームから眺める。雲一つ無い快晴だった。

時々吹き抜けていく風は夏のそれとは違ってひんやりとしており、着実に冬が近づいてきている事を白山に教えてくれる。太陽の光は優しく辺りを照らし、夏に感じた焦げ付くような強さはもう残っていない。

この太陽の日差しとも後数ヶ月すればお別れだ。山を覆う紅葉が枝から落ちてしまえば、すぐにでも辺りは雪に覆われて純白の世界になる。

雪の中を走る事に慣れたとは言え、雪の積もった信越線を走るときは気を抜くことが出来ない。これまで何度も雪の中で立ち往生して、金沢の整備士やその他の列車に迷惑を掛けてきた事を思えば、毎年冬の前になると、今年もまた迷惑を掛けることになるかもしれないと気が

重くなるばかりだった。

しかし、その思いも今冬限りだ。今年の春から進められていた白山の車両の改造が終われば、モーターユニット数が増える事になる。これで、今までのように一つ故障した程度では運転に支障を来すことはなくなる。その代わり、自慢だった食堂車が無くなったり、車両数が減ったりしていたが、冬の苦勞を考えれば一時期の事など苦にもならなかった。

その時、ふぁん、と警笛が鳴り響いて、勢いよく車両がホームに滑り込んでくるのが見えた。ブレイキ音と共に速度が徐々に落ちていく。白山は車両の動きに合わせて先頭車の停車位置まで走ると、乗務員用の扉を開けて降りてきたはくたかに向かって敬礼をした。

「お疲れ様です」

「お疲れ様」

はくたかも白山に敬礼を返して、そして何故か吹き出した。

「ごめん、何だかおかしくなつて……」

「僕は別におかしいことは何もしていませんけど……」

「うん、その通り。何もおかしいことはしていませんけど……その、ここで逢うのが、何だかおかしいなあつ

て」

「ここ、というのは今二人が立っている直江津駅のホームの事だ。普段二人が会うのは互いの終着駅である上野か宿舎のある金沢が主で、直江津のような途中駅で逢うことは今まで無かった。何故ならこうすることをはくたかが拒んでいたからだ。」

それを何とか説き伏せて、こうして時々ではあるが途中駅で逢うようになったのはついこの間の事。ダイヤと乗務する列車の都合もあるから、実際に逢った回数はまだ片手で数え足りる程だった。

「高崎の方が良かったですか」

「んー、そうだね……いや、何処だつて変わらないよ」

乗客の乗り降りが終わった事を発車ベルが告げる。それじゃまた後で、と言つてはくたかが車両の中に戻ろうとするのを、白山は引き留めたい思いで一杯だった。その思いをぐつと心の奥に押し込めて、伸びそうになる手を何とか我慢して、代わりに白山は手を振る。

まるで、まだ特急になる前に直江津までくたかを見ていたときと同じような光景だった。ただ、あの時と大きく違うのは、自分の立場だった。今の自分は見習いではなくれつきとした特急だし、はくたかの恋人なのだから。

再び警笛を鳴らしてホームからゆつくり遠ざかっていくはくたかを見送りながら、白山は溜息を吐いた。もうすぐここに自分の乗るべき車両がやって来る。上野行きにそれに乗ってしまえば、金沢に戻るのは夜中だ。白山が金沢に帰ってくる日は、はくたかはいつも先に寝ることなく白山の帰りを待っていてくれるけれど、少しでも長い時間をはくたかと過ごしたい白山にとっては不満だけが募る。

付き合うようになってからも互いに遠慮し合つて、本当の気持ちを伝えられずにいた数年間の事を白山は今でも後悔していた。取り戻せるものならば取り戻してやり直したい、と思うくらいだ。

とにかく、少しでも早く帰れるように頑張ろう、と決意を新たにした白山の後ろから警笛が聞こえた。もうそんな時間かとはつと顔を上げると、そこにいたのは思いがけない人物だった。

「何してるのさ、こんな所で」

顔をしかめて白山を見ていたのは、金沢まで同じ北陸本線を走る特急の一人、北越だった。はくたかの同期である北越は白山から見て先輩なのだが、何となく苦手な気がして、無意識に接触を避けていたのだ。いつもならば直江津で次の列車を待つことなどしないから会うこと

は無かったのに、今日に限って、と内心舌打ちをする。
「もしかして、サボり？さすがエリートは違うねえ。サボりも許されるんだもんね」

「違います！ちよつと用事があつて降りただけです」
「用事？ここに？」

そう言つて北越はわざと辺りを見回すような仕草をした。その行動に白山はぐつと言葉を詰まらせる。直江津は信越本線と北陸本線の交差する駅だが、目立つて大きな施設があるわけでもないし、金沢所属の白山が用事があるとは思えない。言い訳をあつさり見破られて内心盛大な冷や汗を掻いていた白山は、これ以上墓穴を掘らないよう黙つて北越の出方を待つことにした。

北越はふーん、と意味ありげに笑うと、

「何となく察しは付くけどね。ま、雷鳥には言わないでおいてあげるよ」

そう言つて乗務員用の扉を閉めた。まるで白山の追求を拒むかのように、勢いよく。

そのまま北越は金沢に向かって走つていった。ぼかんと走り去る車両を眺めながら、一体何だったんだという思いと、北越には全て見破られているのではないか、という不安が胸を過ぎる。自分はまだいい。問題は、はくたかがその事を知った時にどうするか、だ。

北越とはくたかの仲が決して良くないことは、金沢駅にいる特急なら誰もが知っている事で、その原因は雷鳥にあることも白山は気付いていた。そして、その雷鳥がはくたかに対して白山と同じような思いを抱いている事も知っている。それ故に付き合う前は何かとハラハラしたもののだが、雷鳥にははくたかと白山が付き合っている事は言っていないので、今でもそれは変わっていない。何故なら、はくたかが雷鳥の気持ちに全く気が付いていないからだ。

「不毛だ……とても」

深く深く溜息を吐いて、心に溜まったもやもやを吐き出す。何度かそれを繰り返していると、ようやく白山が乗るべき車両がやつて来た。運転士が白山の姿を見つけて手を振っているのに気付くと、こちらも大きく手を振り返してやる。

「お待ちせしました」

「いや、時刻通りだよ。有り難う」

車両に乗り込めば、後はこの列車と乗客を無事に上野まで運ぶことだけを考えるだけだ。奥歯を噛みしめて気合いを入れると、白山はこれから走っていく線路を真っ直ぐ見据えた。

トラブルもなく順調に走行を終えて金沢に戻ってきた白山は、急いでその日の日報を書き上げて提出用の棚に入れると、バタバタと慌ただしく宿舎に戻った。

食事もそこに部屋のある階へ駆け上がり、荷物だけを自分の部屋に投げ込むと、そこからはくたかの部屋までゆっくり歩いて呼吸を整える。

はくたかの部屋の前まで来ると、一度深呼吸をしてから二度扉をノックした。扉の向こうで何かが動いた気配がしたと思ったら、すぐに鍵が外される音がして、細く開いた扉の隙間からはくたかが顔を覗かせる。

「おかえり、白山」

「ただいま戻りました」

控えめな声で、入る？と尋ねられ、一つ頷くと扉が大きく開かれた。白山はさっと辺りを見回し、誰もいないことを確認してからその扉の向こうに身体を滑り込ませる。

「あまり金沢の宿舎では一緒にいるところを見られたくないんだけど」

そう言いながら白山の前に立つて部屋の奥へ行こうと

とするはくたかに、白山は背後から抱きついた。首筋に顔を埋めるようにして、先輩、と言えば、はくたかが困ったように笑う。

「仕方ないなあ、白山は」

動かそうと僅かに浮かせた足を地面に戻し、胸の下辺りに回された白山の手にはくたかが手を重ねる。いつもと同じ、ひやりとしたはくたかの体温が、白山の皮膚に染み込んでいくようだ。人並みだと思う自分の体温と混ざって心地良い。

腕の中ではくたかが動くのが分かった。そつと腕を緩めると、はくたかの手が離れて行き、腕の中の身体が百八十度回転した。自分の身体が陰になっているのと、はくたかが俯いているのとで、表情はよく分からない。

するりとはくたかの手が白山の背中に回された。腕だけではなく、全身にはくたかの存在を感じ、かあつと顔が火照っていくのが分かった。きつと今、自分の顔は真っ赤になっっているだろう。心臓の音が煩いくらい存在を主張して、それ以外の音は何も聞こえない。

白山もはくたかの背中に手を回した。微かに手が震えている事に、はくたかは気付いているだろうか。

「先輩……」

ねだるように、背中のシャツを掴んで軽く引つ張ると、

はくたかが僅かに顔を上げた。その隙に素早く自分の唇をはくたかのそれに押しつける。はくたかは抵抗することなく白山からの口づけを受け入れ、そつと目を閉じた。

背中に回つたはくたかの手が白山の上着を掴む。手に入つて布地が引き攀れる感触がしたが構わなかつた。今着ているのは夏用の薄手の上着で、近々クリーニングに出す予定だつた。夏が終わり、秋が深まればすぐに生地のも厚い冬用の上着に切り替える事になる。

何度も角度を変えながらはくたかのキスを堪能して、ようやく唇を離す。はくたかの頬は微かに上気しており、普段お世辞にも良いとは言えない顔色が健康そうな色に変わつていた。

「……シャワー、借りてもいいですか」

「いいよ」

はくたかの了解を得て、白山は部屋に備え付けられているバスルームへと向かつた。

何度も身体を重ねた後の気だるい雰囲気から逃れるように、はくたかか身体を起こす。隣には白山がすやすや

と寝息を立てて眠っている。それを起こさぬようそつとベッドから抜け出すと、バスルームへ向かつた。

汗でじつとりと湿つた身体に熱い湯を勢いよく掛ける。身体を湯がいくつも筋を作つて流れ落ちていく様子をぼんやりと眺めた。

白山は身体に決して痕を付けることはしない。それははくたかが以前の上司から虐待を受けていたときに散々痕を付けられていたことを知つているからだらう。いつだつたか一度、何故痕を付けないのか聞いてみた時に、あの人と同じ事をするのが嫌なのだと言き捨てる様になつていた。

自分が汚れている事を知つた後でも、真つ直ぐな目ではくたかを見て、愛しているのだと言つてくれる白山のことをはくたかも同じくらい愛している。最初は自分の立場を、北陸と首都圏を結ぶ特急というはくたかの存在意義を奪うためにやつてきた、という認識しか無かつたのに、今は彼のサポートに回る立場も悪くないと思つていた。たとえ自分が消えることになつても、白山には長く走つていて欲しかつた。やむを得ず上越線経由になつた自分と違つて、彼は白鳥と同じ、信越本線の沿線住民に望まれて生まれた存在なのだから。

はつと意識を引き戻す。長い間湯を当てていた肌はず

つかり温まり、赤く火照っている。泡立てたスポンジで丁寧(ていねい)に身体を洗い、情事(じょうじ)の残滓(ざんざい)を綺麗(きれい)に流(なが)してしまおうと、もういつものはくたかだった。

タオルで身体を拭(ぬ)きながら、白山を守るにはどうすればいいか考える。二人の関係(かんけい)を悟(さと)られないよう、人がいる所(ところ)ではなるべく親(お)しい様子(ようす)を見せないようにしてきた。白山はそれに難色(なんしき)を示(し)したが、少しでも白山の将来(しょうらい)に傷(きず)を残(のこ)すようなことは避(さ)げるべきだというはくたかの主張(しやうてい)により、しぶしぶながらそれを受け入れていた。今はダイヤの都合(ごうご)もあつて、運転時間(うんてんじかん)中に金沢(かねざわ)で二人(ふたり)が一緒に過(あ)ごせるような時間はごく僅(すく)かだから目立(めだ)つてはいなかったが、たまたま時間が合(あ)うときに夕食(ゆじゆう)を一緒に食(た)べたり出来ないのは白山(しろやま)だけでなくはくたかにとつても寂(さび)しいことだった。

あの上司(じょうし)がいなくなつてしまつたのだから、この関係(かんけい)をある程度(ていど)ならばオープンにしても良いのかもしれない。そこまで白山(しろやま)に不利益(ふりえき)にはならないだろうとも思う。が、例(れい)え昇進(しょうしん)や本数(ほんすう)の増減(ぞうげん)に影響(えいじやう)が無くても、周(しゅう)りの特急(とくきゆう)たちとの関係(かんけい)に影響(えいじやう)を及(およ)ぼすことも十分(じゅうぶん)考えられる。特に北越(きたえつ)は自分を目の敵(てき)にしてにいるようだから、これで白山(しろやま)まで目を付けられては……今後(こんご)やり難(がた)くなる事(こと)だつて十分にありえるだろう。

結局(けつくり)はこのままの関係(かんけい)を続けるしかないのか、とため息(ためいき)を一つ吐(つ)いて、はくたかは部屋(へや)へと戻(もど)つた。まだ眠(ね)りの中にいる白山(しろやま)の隣(となり)にそつと腰掛(こしかけ)けると、湯上(ゆあ)りの気配(きはい)に気づ(き)いたのか、白山(しろやま)が身を寄(よ)せてきた。

「……先輩(せんぱい)……」

ももごと寝言(ねご)をつぶやいて、再び(ふたたび)寝息(ねいき)が聞こえてくる。どうやら寝ぼけていただけらしいとほつと胸(むね)を撫(なで)て下(くだ)ろしたはくたかは、乱(みだ)れた白山(しろやま)の髪(かみ)を手櫛(てしづ)で少し整(ととの)えてやつた。

窓(まど)から差し込んでいた月の明(あ)かりが消(き)えて、室内(しやうない)が漆(うるし)黒(くろ)に包(つつ)まれている。もうすぐ夜明(よあけ)だ。はくたかは再び(ふたたび)一日(いちにち)が始(はじ)まることを考(かん)えて、軽(かろ)いめまいを覚(おぼ)えた。